



セネガル共和国ムブル県の Bagana コミュニティの農業学校にて、果樹の周りに種を蒔く様子。 写真提供：江尻健

テーマ： TICAD9 特集

— 目次 —

- 巻頭メッセージ …… 1
- メインピックス …… 2
 - ・森と音が結ぶ心
—アフリカの大地と日本のふるさと—
 - ・イベントこぼれ話：「オカピのふるさとを知ろう
『地球の肺』コンゴ盆地について理解を深める」
—未解決の宿題
 - ・TICAD9 JICA テーマ別サイドイベントとアフリカにおける Synecoculture (シネコカルチャー) の取り組みについて
- プロジェクト紹介 …… 8
 - ・エチオピア「農業及び森林・自然資源管理を通じた気候変動レジリエンス強化プロジェクト」
- キャリア形成インタビュー …… 10
 - ・国際自然保護連合 (IUCN) 大西静氏
- コラム …… 12
 - ・開発途上国におけるサステイナブル・カカオ・プラットフォーム トレーサビリティ分科会主催セミナー開催報告「カカオ産業における森林破壊防止に関する勉強会」
 - ・コルネイユ・エワンゴ教授・独占インタビュー
 - ・森と海の保全隊活動報告「農林業でガーナの未来の一助へ」

■ 巻頭メッセージ ■

JICA 地球環境部 次長 兼 森林・自然環境保全グループ長 三村 一郎

「自然環境だより」の読者のみなさま、今号もご愛読くださりありがとうございます。

毎日、とても暑い日が続きましたが、漸く空気の感じも変わりつつあり、秋の気配を感じる今日この頃です。

秋と言えば、食欲の秋ですが、今年はサンマの魚体が例年と比較し大きく、久しぶりに脂が乗ったサンマを堪能することが出来そうです。栗ご飯と一緒に食べると更に食が進みそうですね。



横浜市の水源（山梨県・道志村）

今回の「自然環境だより」メインピックスでは、「アフリカの森と音楽/Forest and Music of Africa」、 「オカピのふるさとを知ろう：『地球の肺』コンゴ盆地について理解を深める」、「自然再興と土地劣化中立社会への変革～生態系拡張アプローチからの提案～」が紹介されています。クラリネットの原材料となるアフリカン・ブラックウッド（グラナディア）、不思議な動物オカピ等、大変興味深い内容の紹介となります。

また、プロジェクト紹介では、エチオピアで実施中の「農業及び森林・自然資源管理を通じた気候変動レジリエンス強化プロジェクト」を取り上げています。同プロジェクトでは気候変動レジリエンス強化にむけた能力開発等の活動がプロジェクト終了に向けて鋭意、実施中です。

キャリア紹介では、元 JICA 職員で現国際自然保護連合（IUCN）の大西静さんへのインタビューです。大西さんから専門性の強化含め大変示唆に富んだご経験談を共有頂いております。

最後にコラム欄では、「開発途上国におけるサステナブル・カカオ・プラットフォーム」からトレーサビリティ分科会主催セミナー開催報告「カカオ産業における森林破壊防止に関する勉強会」結果の情報紹介、コンゴ民主共和国・コルネイユ・エワンゴ教授の独占インタビューと内容盛り沢山ですので是非お楽しみ願います。



JICA MAGAZINE (<https://jicamagazine.jica.go.jp/>) 10月号では「自然環境保全」が特集されておりますのでご関心ある方は、是非、ご覧ください。

■メインピックアップ■

森と音が結ぶ心—アフリカの大地と日本のふるさと

東京学芸大学講師/クラリネット奏者 田中正敏¹

The poster features a green and white color scheme with a background image of a forest. Text includes: 'JICA*森プラ*TICAD イベント', '「アフリカの森と音楽／FOREST AND MUSIC OF AFRICA」', '6/22 日 15:00-16:00', '@JICA市ヶ谷ビル 2階 国際会議場'. It also lists the performer '田中正敏氏' (Masatoshi Tanaka) and the speaker '仲井一志氏' (Kazushi Nakai). A small image shows a group of students in school uniforms. Logos for JICA and Yamaha are present, along with text about African Blackwood and sustainable forest management.

2025 年 8 月、TICAD9（アフリカ開発会議）の関連イベントとして開催された「アフリカの森と音楽／Forest and Music of Africa²」に出演させていただきました。クラリネット奏者として、そして森林資源の持続可能性を伝える音楽的活動を続ける者として、このイベントは非常に意義深いものでした。

イベントの前半では、クラリネットの素材でもある“アフリカン・ブラックウッド（グラナディア）”がどこからやってくるのか、そしてその森がどのように守られているのかについて、ヤマハ株式会社「音の森プロジェクト」の仲井一志さんと私が対談形式でご紹介³しました。アフリカの森林に育つこの木材は、音響特性に優れ、世界中のクラリネット奏者にとって欠かせない存在です。しかし、その背景には、森林伐採や気候変動、地域社会の課題など、さまざまな問題が存在しています。



仲井一志さんとの対談

対談では、現地の森林保全活動や持続可能な木材調達の取り組みについて、映像や写真を交えながら紹介しました。参加者の皆さまからは、「楽器の裏側にこんな物語があるとは知らなかった」といった声も寄せられ、音楽と環境のつながりに対する関心の高まりを感じました。

¹ 田中正敏氏個人ブログサイト：https://note.com/tanaka_masatoshi

² イベント報告サイト：https://www.jica.go.jp/domestic/hiroba/information/event/reference/2025/202506_01.html
イベント動画サイト：<https://jica-van-cms.jica.go.jp/custom/jica-net/nature-environment-01.html#section01>

³ 仲井一志氏発表資料：

https://www.jica.go.jp/domestic/hiroba/information/event/reference/2025/_icsFiles/afieldfile/2025/07/01/250622.pdf

そしてイベント後半では、全国から集まった73名のクラリネット奏者と8名の打楽器奏者による合同演奏が行われました。年齢も経験も異なる奏者たちが一堂に会し、音を通じてひとつのメッセージを届ける姿は、まさに「共鳴」の瞬間でした。



演奏の様子

中でも、私が指揮とクラリネット演奏を担当した「ふるさと」は、特に心に残る演奏となりました。「ふるさと」は、日本人にとって懐かしさと温もりを感じさせる曲です。遠く離れた土地にいても、心の奥にある原風景を思い出させてくれるこの旋律は、アフリカの森の映像と重なり、まるで地球のどこにいても“ふるさと”は存在するのだと感じさせてくれました。演奏中、客席の方々が静かに耳を傾け、目を閉じて聴いてくださっていた姿が印象的でした。音楽が国境を越え、心をつなぐ力を持っていることを改めて実感しました。

今後は、1万人のクラリネット奏者が集う感謝の祭典を日本で開催し、アフリカの木材生産者の方々をお招きするという夢を描いています。音楽を通じて、文化と環境の架け橋となることを目指し、持続可能な未来への一歩を踏み出したいと考えています。

この寄稿を通じて、読者の皆さまにも、クラリネットの音色の奥にある「森の物語」に耳を傾けていただければ幸いです。そして、「ふるさと」の旋律が思い起こさせるように、自然と人とのつながりを大切にする心が広がっていくことを願っています。



終了後の集合写真

イベントこぼれ話：

「オカピのふるさとを知ろう『地球の肺』コンゴ盆地について理解を深める」 —未解決の宿題

地球環境部森林・自然環境保全グループ 宮中康江

2025年7月27日、よこはま動物園ズーラシアにて、よこはま動物園（運営管理主体：横浜市緑の協会）、JICA共催による、イベント「オカピのふるさとを知ろう：『地球の肺』コンゴ盆地について理解を深める」⁴を開催しました。

このイベントは、JICAがコンゴ民主共和国で実施中の森林分野の技術協力プロジェクトの関係者が昨年来日した折、生物多様性保全の現場の視察先として、よこはま動物園ズーラシアを訪問したことをご縁に、この度開催の運びとなりました。

よこはま動物園ズーラシアは、コンゴ民主共和国を唯一の生息地とする希少動物オカピの保全・繁殖に日本国内で取り組む数少ない動物園です。昨年7月、よこはま動物園では、10年ぶりにオカピの繁殖に成功し、生まれたオカピは「フラハ」（スワヒリ語で「幸福」）と命名されました。奇しくも今年7月は、フラハの1歳の誕生日、さらに8月には横浜で第9回アフリカ開発会議（TICAD9）が開催されるという機をとらえ、本イベントはTICADパートナー事業として実施されました。



ズーラシアで生まれたオカピのフラハ

うだるような暑さの中、イベントには動物園に来園された多くの方がご参加くださり、オカピのふるさと「コンゴ盆地」が抱える課題について、共に学び考えるよい機会となりました。ご来場くださった皆様、ご支援くださった皆様、共催の機会をいただいたよこはま動物園の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。

本イベントに合わせ、よこはま動物園ズーラシアのオカピ飼育舎に展示されている熱帯林に係る展示パネル6点の内容の更新がなされました。新しいパネルは、オカピについて、オカピのふるさと「コンゴ盆地」について、さらにコンゴ盆地の熱帯林の消失の深刻な現状や喫緊の課題について触れており、さらにコンゴ盆地を守るための国際的な取組、そして日本から私たちにできることについて、現地の写真や図をもとにわかりやすくデザインされています。JICAも、コンゴ盆地にちなみ、現地で実施中の事業の写真等をパネルのコンテンツとして提供しました。デザイナーさんのご尽力のおかげで、パネルは、オカピのお尻の縞模様と熱帯林の木々を彷彿とさせる濃い緑のスタイリッシュなデザインを背景に完成の日を迎えました（写真）。

パネル設置の日、外された古いパネルには、度重なる伐採や森林火災により熱帯雨林が刻一刻となくなっ

⁴ イベントウェブサイト：https://www.jica.go.jp/information/seminar/2025/1572707_66420.html

ている危機的現状が記載されていました。今年 5 月に発表された Global Forest Watch レポート によると、昨年、気候変動に起因する火災等の影響で、世界全体で失われた原生林の面積は史上最大との状況です。ズーラシアが開園してから四半世紀、熱帯林を守るため国際的な協力が進められてきてはいるものの、熱帯林が置かれた状況は寧ろ深刻さを増しています。改めて、何が出来るのかを考えさせられる出来事でした。今回新たに設置されたパネルは、これからも長くオカピ飼育舎にてこの未解決の問題、すなわち熱帯林のおかれた危機的状況について来園者に訴え続けることでしょうか。今年の夏、ズーラシアを訪れた子どもたちが大人になったころ、パネルに掲載されたコンゴ盆地の状況はどうなっているのか。今般 JICA がコンゴで協力した森はその後どうなっていくのか。引き続き住民と共に森を守っていくことが求められます。



常設展示パネルの様子 提供：よこはま動物園

TICAD9JICA テーマ別サイドイベントと アフリカにおける Synecoculture（シネコカルチャー）の取り組みについて

地球環境部森林・自然環境保全グループ 中村元哉

1. TICAD9 テーマ別サイドイベントの報告

2025 年 8 月、横浜で開催された第 9 回アフリカ開発会議（TICAD9）において、当グループは株式会社 Syneco⁵と共催で「自然再興と土地劣化中立社会への変革～生態系拡張アプローチからの提案～」と題したサイドイベント⁶を実施しました。

本イベントでは、自然環境と人間社会の健全な機能を回復しながら食料生産を実現する方法について理解を深めることを目的に、アフリカにおける Synecoculture⁷の実践や、北海道における環境再生型農業の取り

⁵ <https://www.syneco.inc/>

⁶ https://ticad9event.jica.go.jp/jp/event/detail_021.html

⁷ Synecoculture はソニーグループ株式会社の商標です。

組み等に関する発表がなされました。また、持続可能な農業の実践を通じて農業生産と生態系回復の両面を実現する方策、乾燥地におけるレジリエントな農業の実践、都市と農村の格差是正といった課題にどう向き合うべきかを議論する場ともなりました。(本イベントの開催報告⁸もご参照ください。)

2. JICA における Synecoculture の取り組み

当グループは 2024 年度から、アフリカにおける農業生産性の向上と生態系回復の両立を目指し、Synecoculture 導入の検討を進めてきました。2025 年度からは、セネガルおよびカメルーンに実証圃場を設置し、現地での実践を開始しています。

Synecoculture は、生態系が本来持っている自己組織化能力を、多面的かつ総合的に活用しながら有用植物を生産する農法です。Synecoculture マニュアル⁹によると、「無耕起、無施肥、無農薬、種と苗以外は一切持ち込まない」という制約条件の中で、植物の特性を生かして生態系を構築・制御し、生態学的に最適化された有用植物を生産する露地作物栽培法と定義されています。多種多様な植物が混生・密生して育つ環境を整えることで、生態系の多面的機能を高め、自然状態を超えた多様性と有用性を備えた生態系を創出する点が特徴です。この農法は、株式会社ソニーコンピューターサイエンス研究所の船橋真俊氏¹⁰によって研究・体系化され、2015 年から砂漠化の影響が懸念されるサヘル地域で実証が行われています。

セネガルでの取り組み

セネガルは、農業活動を含む人為的要因に起因する顕著な土地劣化が課題となっています。特に半乾燥地帯であるサヘル地域では、降雨量の年ごとの変動や季節内でのばらつきが大きく、これが農業生産の不安定化や生態系の脆弱化につながっています。単作や耕起、作物残渣の除去といった一部の慣行農法は、サヘルの脆弱な環境条件のもとでは土地劣化を一層進行させる要因となりうることも懸念されています。このような背景を踏まえ、Synecoculture の導入により、土地劣化の抑止と生態系機能の回復、そして持続可能な作物生産の両立を実証することを目指しています。



カカオ農園を管理するコミュニティとそのサポートを行う現地再委託先の様子。同サイトでカカオ栽培下における Synecoculture の実証業務を行う



セネガルの実証サイトの様子

⁸ https://www.jica.go.jp/information/press/2025/_icsFiles/afieldfile/2025/09/22/ShizenSaikou.pdf

⁹ 日本語版マニュアル：[協生農法実践マニュアル（2016年版） | Human Augmentation of Ecosystems](#)
英語版マニュアル：<https://www.human-augmentation-of-ecosystems.net/>

¹⁰ <https://www.sonycs.jp/people/masatoshi-funabashi/>

カメルーンでの取り組み

国際カカオ機関（ICCO）の統計によると、カメルーンは世界第5位のカカオ生産国であり、国際市場でも重要な地位を占めています。近年、カカオ生産量世界第1位および2位のコートジボワールとガーナでは、気候変動や病害等の影響により生産が不安定化しており、中長期的にはカメルーンを含むコンゴ盆地での生産拡大に注目が集まっています。このような背景も踏まえ、「持続的森林エコシステム管理能力強化プロジェクト¹¹」の成果も活かしながら、①既存のカカオ農園の下層に Synecoculture を導入し、生態系の回復とアグロフォレストリーの深化を図る取り組み、②森林伐採後の劣化地に Synecoculture を導入し、土地や植生の回復を図りつつカカオの生産を行う取り組みを進める予定です。新たな森林伐採を伴うことなく、既存のカカオ農地や劣化地を再生・活用しながら農業生産性と生態系機能の回復を両立させるアプローチの確立を目指します。

3. ソニー銀行株式会社からの寄附

これらの取り組みに賛同いただき、ソニー銀行株式会社と寄附合意書を締結¹²し、2025年度からの5年間にわたり、毎年度1000万円のご寄附をいただく予定です。寄附金は、Synecocultureの導入に関する取り組みに活用させていただきます。

4. 今後の展望

今後は、セネガルおよびカメルーンでの実証成果を現地で可視化しながら、コミュニティ、現地パートナー、両国政府と協力のもと両国内での展開を図りつつ、同様の課題を有する他国への拡大も検討していく予定です。



カメルーンの実証サイトの様子



パイロット圃場立ち上げ時、ココヤシの周りにラッカセイやササゲ、綿花などを播種している様子

¹¹ <https://www.jica.go.jp/oda/project/1601929/index.html>

¹² https://www.jica.go.jp/activities/issues/natural_env/information/2025/1573099_66670.html

■プロジェクト紹介■

エチオピア

「農業及び森林・自然資源管理を通じた気候変動レジリエンス強化プロジェクト」

エチオピア・長期専門家（チーフアドバイザー／気候変動政策） 三木俊伸

JICA はエチオピアの自然資源管理分野で協力を続けています。その起点は、リオ・サミット（1992年）で謳われた「持続可能な開発」や「森林原則声明」のような、世界的な森林関係の合意がなされた時代に辿り、1994年に日本政府に対して要請された「エチオピア国南西部地域森林保全計画調査(1996-1998)」に遡ることができます。この事業は、当時のオロミア州、ガンベラ州、南部エチオピア州の3州にまたがる約2,700千haの範囲の空中撮影に基づき、現在のオロミア州ジンマ県にあるベレテ・ゲラ森林をインテンシブ・スタディエリアと定めて実施され、同エリアを対象に10年間の森林管理計画を策定しました。この計画は、森林利用、造林・保護、社会林業施策、施設整備の各計画で構成されるものでした。



山引き苗の植林実習の様子

こうした計画ももとに要請された「ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ1・2（2003-2012）」を皮切りに、JICAはその時代の支援潮流にも呼応しつつ複数の事業フェーズを経て協力を続け、「農業及び森林・自然資源管理を通じた気候変動レジリエンス強化プロジェクト（2021-2026）」に至っています。この事業では、オロミア州で実施してきたファーマー・フィールド・スクール（FFS）を通じた自然資源管理・人材育成支援事業や森林認証コーヒー支援事業の系統を受け継ぎ、これらを気候変動レジリエンス強化にむけた能力開発の文脈で発展的に解釈して実施中です。

プロジェクトは4つの成果で構成されますが、レジリエンスの向上や能力開発面でプロジェクトが採用している中核的なアプローチがFFSです。FFSはFAOがインドネシアで始めたアプローチですが、30人前後の農家がグループを構成し、選定されたグループメンバーの農地の試験圃場集って、観察・分析・実験を通じて新しいアイデアを概ね週1回・3~4時間学習するもので、グループを主体とした参加型学習手法です。これにより、農家自身が農林業における問題を発見して解決策を検討できるようになり、農家が意思決定能力を高めることを目指しています。エチオピアには大小の雨季と乾季があるので、FFSを通じて十分なエンパワーメントを得られるよう約1年間をひとつの学習サイクルとして実施しています。こうした現場の活動を計画・準備からモニタリングに至るまで対応するのが政府の普及員や技術支援要員などで、それぞれマスタートレーナー、コーディネーター、ファシリテーターとして育成する支援を行っています。

プロジェクトでは混合農業のほかにも参加型森林管理の分野で FFS を実践しています。後者はベレテ・ゲラ地域において森林管理組合 (FMC) の活動に手法を援用しており、森林生態分析 (Forest Eco-System Analysis: FESA) を行うことで農家が森林の構造や動態を観察し、主体的に行動計画を策定することを支援しています。これを通じて天然更新補助活動を推進し、具体的には農家が郷土樹種の苗木を近隣の林から採取し苗畑で育成する「山引き苗」を活用した森林回復のための森林内への補植活動や、自然更新木の保護が実践されています。さらに、こうした多様な郷土



FFS 圃場での作物育成観察・分析結果をまとめる農家

樹種の苗木を、樹種毎に異なる特性に合った適切な場所に植栽するため、農民の伝統知を活用しつつ、樹種と植栽適地のマッチング評価のためのワークショップを導入・試行しています。これにより森林を利用する農民や、普及員等の技術指導する側においても、光条件など樹種毎の適性を踏まえた植栽が可能となり、苗木の活着率向上が期待されます。こうした試みはオロミア州当局も高く評価し、プロジェクト活動を近隣地域や隣接する他県で展開することを目的にスケールアップ計画が策定され、現在予算化に向けた調整が当局内で行われています。

プロジェクト活動には、これまでの支援フェーズを通じて培った FFS の人材育成やそのシステム化も射程に含まれます。オロミア州で培った経験をもとに、FFS の人材育成だけでなく FFS の品質管理のためのガイドラインをまとめるとともに、Climate Smart Agriculture の推進や自然資源管理分野で FFS 実践してきた経験・教訓を取りまとめることで、オロミア州政府だけでなくエチオピア連邦政府で広く FFS が活用されるよう準備を進めています。作成した映像教材を Youtube で公開し、また、連邦政府の農業省が世銀や IFAD の支援を得て実施する複数の開発プログラムと協働し、これらのプログラムが FFS を導入するうえでの人材育成やモニタリングなどの局面で協力しており、プロジェクトの取り組みはオロミア州を超えて他の地域に広がりつつあります。

また、FFS を通じた農家のエンパワーメントを「気候変動に対するレジリエンスの向上」の文脈で捉える現地調査もプロジェクト活動に含まれ、農業省の気候変動・調整チームとともに、FFS を卒業した農家を対象に追跡調査を継続しています。現在、エチオピア政府は COP30 会議に向けてパリ協定で定められた「国が決定する貢献 (NDC)」の更新作業を進めており、エチオピア政府の気候変動適応・緩和の戦略や計画に関連させながら、プロジェクトの知見を取りまとめることにしています。並行して、JICA 研究所でもエチオピアを調査対象地のひとつとして FFS を通じたレジリエンスの調査研究が行われているので、得られた知見も通じて FFS の可能性や示唆を発信していくことを目指しています。

プロジェクト紹介サイト：<https://www.jica.go.jp/oda/project/1900309/index.html>

■ キャリア形成インタビュー ■

国際自然保護連合 (IUCN) 大西 静 氏

インタビュアー：JICA 地球環境部 森林・自然環境保全グループ 毛笠 貴博

大西 静：

国際自然保護連合 (IUCN) シニアプログラムオフィサー。JICA にて環境管理・気候変動対策、農業水産開発、仏語圏アフリカ協力、欧州ドナー連携等に従事。生物多様性条約事務局を経て、現在は IUCN にてブレンデッドファイナンスを通じた民間セクター連携を担当。



Q：ご経歴について、大まかにお願いいたします。

大学卒業後、JICA に入構しました。入構当時は緒方貞子さんが理事長で、早速在外 OJT でセネガルに行き、その後は課題部¹³等で勤務しました。技術協力事業など各分野の専門家の方々と一緒に進める仕事は学びも多く、とてもやりがいがありました。農村開発部やマダガスカル事務所に勤務した後、国内長期研修として環境ガバナンス修士号を取得しました。地球環境部に勤務の後、生物多様性条約事務局にて、JICA との連携や、SDGs への生物多様性の主流化などを強化するポストに。その後フランス事務所に赴任、一転して先進国ドナーとの援助協調や欧州政策潮流の分析が主な業務となりました。はじめは開発協力の現場からは遠い業務と感じていましたが、途中から面白くなってきました。ヨーロッパでは気候変動政策が進んでいて「次は生物多様性政策を推進しよう」という時期で、特に民間企業のリソースをいかに活用しつつ環境問題への取り組みを進めるかという命題に試行錯誤している時期でした。自分もそうした仕事に関わってみたいと思い、関連するブレンデッドファイナンス事業を実施していた IUCN に移って今に至ります。IUCN ではビジネス・アンド・ネイチャー・チームという民間連携を担当する部署に所属しています。

Q：もともとのご専門も自然環境・農村開発などでしょうか？

大学の学部では動物生態学を専攻しました。小さい頃から動物が好きで、動物のテレビ番組をよく見たり本を読みあさったりしていました。馬が好きで、大学の時に2週間くらいモンゴルに行き、草原で馬に乗る経験をしました。そこで草原の生態系とモンゴルの社会のつながりに衝撃を受けました。遊牧民の暮らしがいかに脆弱な生態系に依存しつつもバランスを保っていて、そしてモンゴルという国が形作られているのかと。その中で国が発展するにつれて新しい開発課題、例えば都市化に伴う大気汚染やストリートチルドレン問題も出てきていた。やはり人間社会の問題に取り組まないと自然との共存には意味がない、と思い JICA への就職に至りました。

Q：動物生態学に興味を持ったきっかけ・エピソードなどは？

子どもの時から動物が好きだったっていうのが一番大きいですね。また、「動物のお医者さん」という漫画を読んで、何か生物に関する勉強をしたいと思います。

¹³ 各分野の案件をコンサルタントや専門家との協議をしながら業務管理を行う部署。上記の地球環境部や農村開発部（現：経済開発部）も課題部に当たる。

Q：IUCN へのきっかけや、決めた時と実際入ってからのギャップなどは？

もともと国際機関や他ドナーの取り組みに興味がありました。生物多様性条約事務局での勤務は視野を広げる機会になりました。

IUCN に入ってからギャップについてですが、IUCN は会員制の国際機関で、会員には各国の政府の組織だけでなく NGO や市民社会組織も多いため、トップダウンで動きやすい完全な政府系の機関に比べると、内部の意思疎通が難しいと感じることもあります。

Q：現在されているお仕事について教えてください。

主にブレンデッドファイナンス、つまり民間資金と公的資金を混ぜて、民間だけでは進出が難しい地域や事業分野で環境・気候にポジティブなインパクトをもたらすビジネスを推進していくプログラムを、GCF や GEF など国際的なドナーの資金を得て行っています。キャパシティビルディングにも重点を置いており、民間企業、金融セクター、途上国の政府や自治体などに対する研修なども展開しています。さらに、ビジネスや金融セクターによる昆明モントリオール生物多様性枠組との整合性の強化も始まっており、TNFD 等の枠組に沿った情報公開や戦略立案における、IUCN の知見を活用したインプットの支援を始めています。



ジュネーブの年次サステナブル投資会合で、自然への投資パネルを司会（左端が大西氏）

Q：お仕事される中で、JICA でお仕事されてきたことが直接生きているという部分はありますか？

私の仕事の基盤となっているのが JICA で培った経験です。各国や世界の政策の動きを踏まえながら、事業実施に向け関係者との合意形成を行っていく経験は生きていると思います。JICA では政府同士の仕事を中心でしたので、調整しやすかったのですが、ブレンデッドファイナンスでは関係機関が全然違う任務や性質を持っているので、その点に難しさを感じています。IUCN のような非営利の国際機関は途上国社会や環境への便益を重視する一方、ファンドマネージャーは一定水準以上の財務リターンを追求する責任を負ってお

り、すり合わせに時間がかかります。ただ、そこも JICA で培ったプロジェクトマネジメントや関係者調整のスキルは生きているかなと思います。

Q：今後自然環境分野でキャリアを形成していこうという方に、何かメッセージやアドバイスがあればお願いします。

国際的なアジェンダや政策から新たな事業ニーズが生まれることが多いので、自分の関心事項と政策の潮流がどうつながっているのかが分かると、活躍の機会をつかむヒントになるのではと思います。あとは自分の興味のあることを自己学習すること。ポッドキャストを利用したりして、なるべく勉強するようにしています。また外での発表の機会があれば積極的に参加すると良いと思います。自分で考えていることを他の人に伝わるように発信するのは良い訓練になると思います。

Q：最後に読者の皆さんにお伝えしたいことがあれば

色々なキャリアパスがあると思います。例えば一つの分野や技術を極めていくエキスパートの道もあるし、複数の政策分野を横断的に見つつ専門家を動員するジェネラリスト寄りの役割も、どちらも重要だと思います。最近ではバイオプラスチックなどの革新的な技術の開発を通じた環境問題の解決、またそれを後押しするベンチャー投資家も見かけます。様々な専門性やスキルが必要とされる中で、自分の興味と強みに合ったキャリアパスを選ばれると良いのではと思います。



■ コラム ■

開発途上国におけるサステイナブル・カカオ・プラットフォーム トレーサビリティ分科会主催セミナー開催報告 「カカオ産業における森林破壊防止に関する勉強会」

開発途上国におけるサステイナブル・カカオ・プラットフォーム事務局
デロイト トーマツ コンサルティング合同会社 小野 美和

「開発途上国におけるサステイナブル・カカオ・プラットフォーム¹⁴」のトレーサビリティ分科会主催で「カカオ産業における森林破壊防止に関する勉強会¹⁵」を開催しましたので、ご紹介させていただきます。

「開発途上国におけるサステイナブル・カカオ・プラットフォーム」は、JICA が 2020 年に設立した協働の場で、多様なステークホルダーが参加し、カカオ産業の児童労働や貧困、森林破壊といった課題解決を目指しています。その中で活動するトレーサビリティ分科会は、持続可能なカカオサプライチェーンの構築を目指し、トレーサビリティ向上とその先の施策について環境面、社会面、経済面等の多角的な視点での議論を行う場となっています。この度トレーサビリティ分科会主催で、カカオ産業における森林破壊防止をテ

¹⁴ <https://www.jica.go.jp/activities/issues/governance/platform/index.html>

¹⁵ 当日の概要： https://www.jica.go.jp/activities/issues/governance/platform/news/2025/1573910_68627.html

マとして、EUDR（欧州森林破壊防止規則）に関する勉強会を2025年7月25日に開催しました。

世界では毎年約330万ヘクタールの森林が失われており、気候変動、生物多様性の喪失、土地の劣化、砂漠化など、環境に広範な悪影響を及ぼしています。欧州においてはEUDR（欧州森林破壊防止規則）が制定され、2025年12月から適用される予定となっています。これはEU市場で流通する製品が森林破壊や劣化に関与していないことや合法性を証明することを企業に義務付ける規則で、対象品目にはカカオ、コーヒー、パーム油、木材、牛肉などが含まれます。企業は生産地情報の収集やリスク評価を通じて、サプライチェーン全体で森林破壊を防ぐ体制を構築する必要があり、持続可能なビジネスモデルへの転換を求められています。

当日は「プリファード・バイ・ネイチャー（Preferred by Nature）」より、EUDRの概要、最新動向、実務対応等についての解説をしていただきました。プリファード・バイ・ネイチャーは国際的な非営利団体で、持続可能な土地管理とビジネス実践を推進し、森林、農業、サプライチェーンなどの分野で、認証サービス、アドバイザリー、能力構築、啓発活動等を行っている国際NPOです。第一部では、プリファード・バイ・ネイチャー小林様よりEUDRの基本的な情報をお話いただき、第二部ではRazanamandranto氏、Bender氏より、EUDRのより実務的な解説として、EU市場に対象作物・製品を供給、輸入する企業に求められる事項やデュー・ディリジェンスの具体的な運用、現場の課題とその対応策、支援ツールが共有されました。さらにガーナでのアグロフォレストリー農法の導入事例や、農家の収益向上に向けた具体的な取り組みが紹介され、その後活発な質疑応答が行われました。

実際の運用においては、オペレーター（EU市場に製品を供給、輸入する企業）は、産地情報の収集、リスク評価、リスク軽減のためのデュー・ディリジェンスを実施し、証明書類を提出する必要があります。カカオ豆の混入リスクや迂回リスク（リスクのある製品が、意図的に低リスクの国を通じて取引されること）、土地権利問題、情報収集の困難さが課題であり、児童労働・強制労働、農家の高齢化、貧困も深刻化しているのが現状です。一方で、EUDRはサプライチェーンの透明性向上やステークホルダー間の対話促進といったポジティブな機会を提供しているため、これを契機として生産地の持続可能な発展を目指す取り組みが促進されることが期待されます。

本勉強会を通じて会員の皆様と課題を共有し、共通認識を深めることで、持続可能なカカオサプライチェーンの構築に向けた一歩を踏み出すきっかけとなっていれば幸いです。

The image contains two side-by-side panels. The left panel is a webinar poster with the following text: 'ウェビナー EUDRとカカオ: 日本のステークホルダーが知っておくべきポイント' (Webinar EUDR and Cocoa: Key points for Japanese stakeholders), '日本語・英語 (通訳あり)' (Japanese/English with interpretation), '25日 7月 | 14:00 - 17:00 (日本時間)' (25th July | 14:00 - 17:00 JST), and logos for Preferred by Nature and JICA. The right panel is a world map titled 'EUDR国別リスクベンチマーク' (EUDR Country Risk Benchmark) with a legend: Low risk (green), Standard risk (yellow), High risk (red). The map shows South America and parts of Africa in yellow, and Russia and parts of Asia in red. A source note at the bottom reads: '出典: https://www.preferredbynature.com/news/european-commission-publishes-first-5st-country-benchmarks-under-eu-deforestation-regulation - as of 23 May 2025'.

発表資料抜粋（無断転載禁止）

コルネイユ・エワンゴ教授・独占インタビュー

インタビュアー：JICA 地球環境部 森林・自然環境保全グループ 宮中康江

7月27日によこはま動物園ズーラシアにて開催された「オカピのふるさとを知ろう：『地球の肺』コンゴ盆地について理解を深める」への登壇のため来日されたエワンゴ教授に、「自然環境だより」より単独インタビューを行いました。

●プロフィール

コンゴ民主共和国赤道州出身。アフリカ最大の熱帯林地帯であるコンゴ盆地を代表する森林生態学および植物分類学の専門家。1995年にコンゴ民主共和国キサンガニ大学で生物科学の学士を取得後、2006年に米国ミズーリ大学セントルイス校で生態学・保全生物学の修士号を修了。2010年、オランダ・ワゲニンゲン大学で森林生態学・森林管理学を専攻し、環境科学で博士号を取得。コンゴ盆地における調査研究と保全活動に長年従事し、2005年には「環境のノーベル賞」とも称されるゴールドマン環境賞を受賞。2006年にはナショナル・ジオグラフィック協会の「新進気鋭の探検家」に選ばれ、2007年には国際的な講演プラットフォームとして名高いTED グローバルで「コンゴの森の英雄」¹⁶と題して講演。2011年にはフューチャー・フォー・ネイチャー賞を受賞するなど、その環境保全に係る功績は、単なる研究者の枠を超え、世界的に高く評価。現在、キサンガニ大学教授および生物多様性モニタリングセンターのコーディネーターとして活動する傍ら、国際的な研究・保全プロジェクトに携わり、気候変動や生物多様性分野における実践と政策支援を推進。



2025年7月オカピ保護センターにて

●何故医者を目指したのか

私はコンゴ民主共和国の西部（赤道州）の出身です。病気が蔓延する地域で、自分自身幼少期に麻疹で命を落としかけました。また、小学2年の時に、妹をマラリアで亡くしました。地域には医者が少なく、自分が医者になって村を救わねばという思いから、キサンガニ大学に進学し、医学部を志しました。

¹⁶https://www.ted.com/talks/corneille_ewango_a_hero_of_the_congo_forest?language=ja&theme=3%3Futm_campaign%3Dtedspread%3Futm_campaign%3Dtedspread

●植物学に進んだ理由

当時、医学部、生物学部、農学部の3つの選択肢がありましたが、医学部は3度挑戦しても受からず、生物学を選びました。本当は医学部がダメなら、食糧生産に貢献できる農学部でもいいなと思ったのですが、生物学部は、2年時に医学部に編入できる可能性が高いと聞き、生物学部を選びました。しかし、2年時に医学部への編入を試みたものの、うまくいきませんでした。生物学部でダーウィンの進化論やその他の生物学を学び進めていくうちに、生物科学を学ぶ面白さに目覚めました。元々森に囲まれた地域に生まれ育ったこともあり、幼少期の経験を始め、すべてが生物科学につながっていることに気づいたのです。動物も好きでしたが、動物よりも種類が多い植物の方の関心が高かったです。生物学の中でも植物学を勉強し、植物分類学で自分の可能性に向けて挑戦しようと思いました。

●イトゥリでの活動を始めた経緯

大学院に在学していたとき、コンゴ民東部のイトゥリ州で活動を展開していた米国 NGO、WCS (Wildlife Conservation Society) で2か月間インターンをしました。当時 WCS ではコンゴ人の学生を探していて、私は WCS で初めてのコンゴ人学生として、希少種オカピの保全に関わりました。イトゥリでは「ピグミー」と呼ばれる先住民族に会いました。先住民族は、オカピの生態や森の生活のすべてを知り尽くしていました。私は、大学で学んだ科学的な知識が現場では伝統的な知識としてその場に生きついていることに驚きました。私は大学での成績は優秀で、このまま大学院に残り、助手になり、博士号をとることを夢見ていました。しかし WCS 代表は私の熱心な活動振りを評価し、WCS に残り、イトゥリの森の調査をしないかと言いました。そこで、私は博士号取得の夢を追うのではなく、WCS 活動への参加の道を選びました。WCS では、先住民族 10 名と共に森林生態学の調査を行いました。調査を通じ、先住民族の伝統的知識が科学的知識を合致していることに驚嘆しました。例えば、先住民族「ピグミー」たちは、科学的知識や遺伝子情報なしに、同じ科の植物の類似性を見事に言い当てます。これは農耕民族であるバントゥー族には見られないことで、イトゥリで暮らす先住民族のみならず、森で暮らす先住民族が共通に持つ知識です。私は 20 年間先住民族と関わり実に多くのことを学びました。



JICA 本部にてインタビュー時

●人生を変えた人との出会い

自身が最大の影響を受けたのは、ジョン=テレーズ・ハート¹⁷夫妻です。二人は、イトゥリのオカピ動物保護センターの立ち上げメンバーです。私自身、WCS で働くことを通じ、自然への情熱を仕事とできるようになりました。自然の保全のためには、科学的知見が必要不可欠です。WCS を通じ自然保護にかかる欧米科学者、とりわけ多くのアメリカ人研究者と出会い、その熱意や研究への真摯な取り組みに多いに刺激を受けました。実は、森と自分自身の研究の繋がりについて、乖離がありました。私が生まれ育った赤道州の湿地の森の植生は、コンゴ盆地の東のはずれのイトゥリの森とは違います。森林の研究には携わることができまし

¹⁷ 詳しくは 7 月 27 日シンポジウム登壇資料：https://www.jica.go.jp/information/n_files/1572707_006_1.pdf

たが、自分が生まれ育った森の研究というわけではなかったのです。そして、2017年、英国リーズ大学のサイモン・ルイス教授と共に、コンゴ中央部のサロンガ国立公園（世界自然遺産）に行ったときの事です。胸まで水につかり進んでいたとき、サイモン教授にこういう場所を知っているかと聞かれたので、私は、この地域によくある環境だと答えました。その後、サイモン教授と共にリモートセンシング技術を使い解析し、コンゴ盆地の「泥炭地」を発見したのです。私は、研究を通じ、コンゴ盆地の森、そして自分が生まれ育った森についても知ることができてとても幸運でした。

●日本での滞在中感銘を受けたこと、帰国後の活動にヒントを得たこと

滞在中は、日本人の自然や災害へのコミットメント、伝統の継承、環境への配慮の仕方に感銘を受けました。そして、日本人が日本以外の地に思いを馳せているのに感銘を受けました。この前のシンポジウムでも、日本の聴衆たちは、コンゴ盆地に行ったこともなく、コンゴ盆地から何万キロも離れているというのに、コンゴ盆地の将来を心配してくれていたことに感動しました。

●森林分野、生態学を学びたい日本の若い世代へ一言

私は、森林科学、森林生態学を学んでよかったと思っています。後悔はありません。多くの人に森林科学を学んでもらいたいと思います。私たちの生活は森と深く結びついています。森を知ることは重要なことです。東京滞在中、「牧野植物園」を訪問したのですが、1人の人間がやってきたことが150年の時を経て後世の人達に評価されていることに大変感銘を受けました。牧野富太郎博士の在り方に色々と示唆を得ました。

●コンゴ盆地に関心を持った日本の一般の方々へ一言

気候変動は、途上国のみならず、先進国の問題でもあります。ですから、先進国から途上国への支援が不可欠です。特に、研究援助を通じたコンゴ盆地の若い世代への能力支援は重要です。コンゴから日本への留学生の受け入れも大事ですが、現地の大学を支援いただくことでより多くの学生の未来を変えることができます。研究援助、研究環境の改善、現地コミュニティの支援等、ニーズは色々あります。



JICA 本部来訪時（左から大仲専門家、JICA 毛笠、エワンゴ教授、宮中）

森と海の保全隊活動報告「農林業でガーナの未来の一助へ」

JICA 海外協力隊 2023 年度 3 次隊 ガーナ共和国派遣 コミュニティ開発
アサンテアチムサウス郡 農業局配属 松田 靖大

ガーナはカカオや金の産地として有名で西アフリカに位置します。政治が安定しておりフレンドリーな人が多く、平和な国と自負する人も多い国です。この前はタクシーの運転手が世界一平和と自負していました。

物心ついたところからアフリカの現状に関心を持ち、食糧問題や貧困について学生の頃学んでおりました。国連食糧農業機関（タイ）のインターン、難民キャンプ視察、食品メーカーを経験し、何か自分にできることがないか、実際に生活して現状を知りたいという思いで参加しました。

<試験場を作り稲の栽培>

配属先である農業局の要望で稲作に取りくんでいます。私の任地の主な栽培作物はキャッサバ、ヤムイモ、トウモロコシでお米の栽培は多くありません。理由としては雨水に頼る農法の為天候に左右されてしまうからです。また日本のような水田が少ないためまず水田を作り同僚たちと共に稲の試験栽培を始めました。

<植林を通した環境問題への取り組み>

ガーナでは違法採掘や違法伐採による農業被害が深刻です。右の写真は池か何かに見えますが、実は違法採掘の跡になります。金の採掘において水銀を使うため、人体への健康被害や農作物の被害が起こり、周辺の農家さんの畑が汚染されてオクラが栽培出来なくなりました。また違法伐採などの影響で洪水被害をもたらしています。

その為、農業や林業、環境を守るためにニームの木の植林を行いました。ニーム（Neem）は主にインドや東南アジアで栽培されています。ニームは、



国の農業プロジェクトで農村の現状調査



稲の試験栽培



放置された違法採掘の跡地

アーユルヴェーダ医療で様々な疾患の治療に使用されてきた薬木です。また、「村の薬局」とも呼ばれ、アブラムシなどの虫除けに効果があることでも知られています。このニームを木炭にする際に抽出される木酢液は、時には防虫、時には肥料としての効果も期待されます。

違法採掘や違法伐採を行ってしまう理由は、すぐに現金収入が入ることです。このような現状を少しでも改善できるように、農林業で収入をしっかりと得ることができるような仕組み作りが大切です。私が帰国した後も自ら取り組んでもらえるように、残りの期間を活動していきます。



植林活動

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ご意見・ご感想をお待ちしております。(下記のフォームにてお願いいたします)
アンケートフォーム: <https://forms.office.com/r/inPsfNBJQS>

JICA 地球環境部森林・自然環境保全グループ 自然環境保全課題支援事務局
TEL: 03-5226-6656 FAX: 03-5226-6343
e-mail: jicage-nature@jica.go.jp

自然環境だよりバックナンバー

http://www.jica.go.jp/activities/issues/natural_env/nature_info.html

